

キエルケゴールの「罪」理解

——『死に至る病』を手掛かりに——

山 本 忠 義

小論は、「死に至る病」を中心テキストにし、キエルケゴールの「罪」理解を絶望の側面から考察するものである。尚、副次的なテキストとして『不安の概念』を参照したい。

『死に至る病』の仮名著者は「桁外れに高いキリスト者」を意味するアンティークリマクス (Anti-Climacus) となっており、その副題は「建徳と覚醒とをを目指すキリスト教的心理学論述」となっている。このことから、この著作は主にキリスト者の建徳と覚醒を目指したものであることが窺える。

『死に至る病』の内容構成には、三つの際立った特徴がある。第一に、第一編の「死に至る病とは絶望である」が人間学的、心理学的に論述され、第二編の「絶望は罪である」が神学的、教義学的に論述されて、第一編と第二編との間に弁証法的転回が見られること。第二に、第一編で扱われる「絶望」は人間的絶望であり、第二編で扱われる「罪」は神学的絶望で、絶望が質的に強化されたものであること。それ故に、「絶望は罪である」と同時に「罪は絶望である」とも表現できるのであるが、本書では終始、罪が絶望の面から分析され、分類されていること。第三に、第一編では「絶望」が人間の内なる「永遠的なもの」に対する自己意識の度合いの上昇に応じて、および第二編では「罪」

と「躓き」が「神」と「キリスト」に対する自己意識の度合いの上昇に依りて、それぞれ分析、分類されていること。【死に至る病】全体においても、「絶望」と「罪」と「躓き」とがパラレルな対照的關係に置かれて、それぞれの中で自己意識の度合いの上昇が見られること。自己意識は「永遠的なもの」と「神」と「キリスト」に対する、無意識（無関心）から絶望の第一形態である意識的弱さ（逃避）と第二形態である意識的強情（反抗）へと上昇していき、遂には強情の極点としての「悪魔的なもの」にまで至るということ、である。

さて「死に至る病」における「死に至る病」とは、普通の心身の病ではなく、キリスト教的な精神の病、自己の病である。キリスト教的な精神とは、人間の内にあり、神に通じ、神と交わるところの「永遠的なもの」である。それは単なる時間的、有限的なへ心・肉体へにおける心理的規定のもとにあるものではなく、それとは矛盾対立する永遠的、無限的な精神的規定のもとにあるものである。人間の自己は、絶望して死のうと望んでも、死ぬことさえできない「永遠的なもの」を宿しているのである。絶望とは文字通り死ぬ望みさえ絶たれていることの表現である。そして絶望は普遍的な病で、人間は何らかの意味で必ず絶望しているという。「絶望していることを意識していないということ」自体が、絶望の一つの形態なのである。また絶望は精神の病である故に弁証法的である。絶望していないということは、かえって絶望していることを意味しているのである。このように、絶望は本書全体を通して「死に至る病」と理解されているのであるが、「真の」キリスト者のみが「死に至る病」が何を意味しているのかを知っている、とキェルケゴールはいう。

【死に至る病】本論冒頭の規定によれば、人間は精神、すなわち自己である。そして、自己については、「自己」とはそれ自身に關係する關係である、あるいはその關係において、その關係がそれ自身に關係するということ、そのこと

である。自己とは関係ではなくて、関係がそれ自身に関係するということである」といわれる。また人間については、「人間は有限性と無限性との、時間的なものと永遠的なものとの、自由と必然性との総合、要するに一つの総合である」といわれる。結論的にいえば、ここで人間を本質的に構成する総合は「時間的なものと永遠的なものとの総合」である。それ故に、自己とは「時間的なものと永遠的なものとの総合」という関係において、「関係がそれ自身に関係する」という意識的、意志的な主体的関係行為（動態）に外ならないことになる。人間が精神となり、自己となるためには、総合の契機としての「永遠的なもの」が、永遠のアトムとしての「瞬間」において、精神として措定され、覚醒し、みずからの総合を意識的に果たすのでなければならぬ。この時、永遠的なものとしての精神はみずからの関係を意識し得る主体となるのである。それは、普遍的抽象的な人間（関係）が、特殊的具体な自己なる精神（関係がそれ自身に関係する）として目覚めることに外ならないのである。

この自己なる関係は、他者（神）によつて措定された派生的な関係で、「それはそれ自身に関係する関係であるとともに、それ自身に関係することにおいて他者に関係する関係である」といわれる。人間は自己の内に自己関係と他者（神）関係という二重の関係をもつ存在なのである。ここから本来的な絶望に二つの形態があることになる。第一形態の絶望は「絶望して自己自身であらうと欲しない絶望」であり、第二形態の絶望は「絶望して自己自身であらうと欲する絶望」である。後述するように、もし人間が自分の自己を自分で措定したものであれば、第一形態の絶望しか考えられないし、またもし人間の自己が他者（神）によつて措定され派生させられたものでなければ、第二形態は考えられないのである。

しかも、「人間を関係たらしめた神は、人間をいわば彼の手から解放するのである、こうして人間は自己自身に関

係する関係となる。ところで、その関係が精神であり自己であるという点に責任がある故に、あらゆる絶望はかかる責任のもとにある」とキエルケゴールはいう。それ故に、絶望とは自己の責任において「瞬間」ごとに招き寄せるところの自己関係の破綻であると同時に、それはそのまま連動して他者（神）関係の破綻をも招き寄せることになる。ここに「絶望は罪である」といわれる根拠が秘められている。絶望は自己関係の破綻、すなわち「時間的なものと永遠的なものとの総合」の不均衡であり、罪は自己関係の破綻による自己関係と他者（神）関係の不均衡である。それ故に、人間は、絶望と罪に陥っている非本来的な自己関係を自己の責任で引き受け、信仰をもって本来的な自己関係として受け取り直すべく要求されている、といえる。人間が総合でなかつたならば、そして総合が根源的に正しい関係として指定されたものでなかつたならば、絶望は全くあり得なかつたであろう。ここに総合が実存生成の課題であることが知られるのである。「死に至る病」において、「瞬間」において指定される精神としての自己が、意識あるいは意志と捉えられていることは決定的なことである。それは、自己が「永遠的なもの」をもっているという自覚でもあり、意識でもある。「概して意識、つまり自己意識は自己に関して決定的なものである。意識が増せばますます自己が増し、意識が増せばますます意志が増し、意志が増せばますます自己が増す」といわれる通りである。そこで「死に至る病」においては、絶望と罪と躓きが終始一貫して自己意識の度合いの上昇に応じて分析され、分類されることになる。絶望も罪も躓きも、自己に関わる精神的規定のもとにある故に、それらは意識あるいは意志と同じ精神的領域に属しているのである。それ故に、絶望については「意識の度合いが増せばますますほど、その増加に比例して絶望の度合いも強くなる、意識が増せばますますほど、それだけ絶望の度合いは強くなる」といわれる。そして、自己意識が上昇すればするほど、その透明度（純度）も増していく。それ故に、絶望と罪と躓きの最高度にある「悪魔的なも

の「や、逆に絶対的に何らの絶望もない信仰の状態は、その自己意識において最高の透明度をもっている、と理解できるのである。たとえば、「悪魔の絶望は最強度の絶望である。なぜなら悪魔は精神そのものであり、その限り絶対的に透明な意識であつて、情状酌量に役立つべき無意識性をもっていない故に、絶対の強情である」といわれるのである。

以下、内容理解の便宜上、「死に至る病」における内容を、(A)「絶望」、(B)「神の前の絶望」(罪)、(C)「キリストの前の絶望」(贖き)、という三つの絶望に大別して、順次、概観し、キェルケゴールの「罪」理解の考察を進めたいと思う。

(A) まず、「死に至る病」において、絶望が自己意識の上昇に依じて分析され分類されている箇所は、第一編C―B「意識という規定のもとにみられた絶望」という箇所である。ここでは、絶望は自己意識の度合いの上昇に依じて、非本来的絶望と本来的絶望との二つに大別されている。

非本来的絶望は、自己が「永遠的なもの」をもっているという意識を欠いている絶望で、それ故に、この絶望は無意識的である。従つて、この絶望の無知は無精神性と呼ばれている。世間に普通に見られるもので、異教徒や、キリスト教界内の自然人(異教徒)が陥っている絶望である、といわれる。

次に本来的絶望であるが、これは自己が「永遠的なもの」をもっていることを意識している絶望である。この本来的絶望はさらに二つの絶望に分類されている。第一形態は女性的な弱さ(逃避)の絶望といわれるもので、「絶望して、自己自身であらうと欲しない」絶望、第二形態は男性的な強情(反抗)の絶望といわれるもので、「絶望して、自

己自身であろうと欲する」絶望である。第一形態では弱さ（逃避）故に、第二形態では強情（反抗）故に、いずれも、本来的な自己自身であろうと意志しないで、非本来的な自己自身を意志する点においては共通しているといえる。第一形態では、「時間的なもの」や現世的なものに価値を置き過ぎる自己から逃避するのであるが、だからといって、自己の内なる「永遠的なもの」を引き受けるだけの自己意識の上昇と自覚の深まりがある訳ではない。第二形態では、自己意識の上昇とともに「永遠的なもの」を受け入れるのであるが、だからといって、柔順に受け入れる訳ではない。「永遠的なもの」の力によつて恣意的な自己を創造しようとするか、あるいは現実の自己に付随する欠陥を理由にねじけた反抗を示して対峙するのである。つまり、第一形態から第二形態に向かつて、絶望の原因とされるものが自己の外から自己の内へと向かっている。これは、絶望の対象が「時間的なもの」から「永遠的なもの」へと向かっていることであり、自己が「永遠的なもの」をもっているという意識、すなわち自己意識が次第に明確になっていることである。そして、絶望も次第に強度を増しているのである。自己意識が明確になるときは、遂には他者（神）を意識することでもある。ところで、自己なる関係が他者（神）によつて措定され派生させられたものでなければ、第二形態は考えられないのである。なぜなら「絶望して、自己自身であろうと欲する」強情（反抗）は、他者（神）を明確に意識した形態であるからである。それ故に、あらゆる絶望はこの第二形態に還元され得るといわれるのである。

先に絶望とは「時間的なものと永遠的なものとの総合」の不均衡であるといわれたが、この総合が正しく果たされるには、自己が精神として覚醒していなければならない。換言すれば、自己意識、すなわち自己が「永遠的なもの」をもっているという意識ができるだけ明確でなければならない。従つて、第一形態のように自己意識が低い場合は、

おのずから総合に不均衡が生じる。その時、同時に、自己逃避的な絶望が生ずるのである。しかし、第二形態のように自己意識が明確である場合にも、総合に不均衡が生じることがある。この時に生ずるのが、強情的な絶望である。自己意識が明確であればあるほど、強情の意志は強い。それは悪意的な強情にまで至るのである。それは、自己の内なる「永遠的なもの」に対する強情、ひいては人間をそのような自己なる関係として措定した他者（神）に対する強情である。ここでキエルケゴールは第二形態の内に行動的自己形態と受動的自己形態という区分を設けているが、受動的自己形態の中で、反抗的な絶望の強まったものとして「悪魔的なもの」に言及している。「絶望して、自己自身であらうと欲する」者のうち、意識が多くあればあるほど、絶望の度合いも強くなり、遂には悪魔的なものにまで至るというのである。「悪魔的なもの」は、外面は全く人目につかないほど「しつかりと錠のおろされている閉鎖性」をもっている。絶望は精神的なものになればなるほど、閉鎖性の中に秘められるのである。「悪魔的な絶望は絶望が最もその度合いを強めた形態であり、人間は絶対的に自己自身であらうと欲する。……彼が自分自身であらうと欲するのは単なる強情の故にはなく、むしろ挑戦せんがためである。彼は自分の自己をそれを措定した力から強情的に引き離そうと欲するのではなく、むしろ挑戦的にその力に迫り、それに自分を押しつけようとして欲するのである」¹⁰。

(B) 次に、「死に至る病」第二編の前半における「神の前の絶望」(罪) について概観してみたい。

これまで、絶望は自己の内にある「永遠的なもの」に対する自己意識の度合いの上昇に応じて分析され、分類されてきた。それでは、罪とは何であるか。第二編冒頭の説明によれば、罪とは絶望の度合いが質的に強まったものである。絶望における「永遠的なもの」に対する意識が、「神の前」なる意識(あるいは神観念)へと弁証法的転回を遂げ

ると、罪と呼ばれるのである。そして罪は次のように定義される。

「罪とは、神の前に、あるいは神観念を抱きながら、絶望して自己自身であろうと欲しないこと、あるいは絶望して自己自身であろうと欲することである」¹¹⁾。

この「神の前に」あるという意識（神観念）が、罪を「有資格の絶望」¹²⁾とでも呼べるものにしてゐる。自己が「神の前に」現存していることを意識するとき、自己の尺度は神となり、自己は無限の自己を獲得することになる。「神の観念が多ければ多いほど、それだけ自己も多い、自己が多ければ多いほど、それだけ神の観念も多い」¹³⁾のである。そして、罪なる絶望は「神」に対する自己意識の度合の上昇に應じて強くなるのである。ここに、キェルケゴールの「罪」理解は、本質的に「絶望」理解（あるいは「関係」理解）と変わりないことが理解できる。罪は「神観念をもった絶望」（あるいは「神観念をもった関係の破綻」）である、と要約できるのである。

また「あらゆる罪は神の前に起こる」¹⁴⁾ともいわれる。これは「神の前に、あるいは神観念をもちながら、神の意志を己の意志としないこと、すなわち神に対して不従順であること」¹⁵⁾を意味する。ここでいわれる神は、警察官のような外的存在ではなく、「神の前に」（それは同時に「神観念」でもある）という意識のなかにある神である。罪はまさに精神的規定のもとにあるのであり、神に対する我意、神の命令に反抗する不従順は、この意識のなかにある神に対して為されるものなのである。絶望は罪であるとともに、罪は「神の前に」起こるのである。

ここで、キェルケゴールは、絶望と罪との間の極度に弁証法的な限界領域として宗教的なものを目指す詩人的実存なるものを紹介する。神観念を抱きながら、諦めという絶望と共通するものをもっている実存のことである。彼は神観念をもちながら、実存しないで空想的に詩作するだけであり、その意識には透明化することのできない弁証法的混

乱が見られる。神の前に、みずからの苦悩を棄てることができない（つまり、それを欲しない）実存の救いのない状況が象徴されている。それ故に、彼は罪とされるのである。¹⁶⁾

以下、キエルケゴールのいう幾つかの「キリスト教的なもの」について瞥見し、更に彼の「罪」理解への考察を深めたい。

第一は、キリスト教的なものなかに含まれる「躓きの可能性」についてである。聖書が「すべて信仰によらぬことは罪なり」（ロマ書一四の二三）と語ってきたように、「罪の反対は信仰である」。キエルケゴールは、「罪対信仰」という対立の底には「神の前に」という決定的にキリスト教的なものがあり、この「神の前に」には「背理」、「逆説」、「躓きの可能性」という決定的にキリスト教的な標準が含まれている、という。躓きの可能性は、「この個体的な人間が神の前に現存している」ということにある、という。そして、人間がキリスト教に躓くのはキリスト教の尺度が神であり、人間にとつては余りにも高いからであるが、「躓き」こそありとあらゆる思弁からキリスト教を防禦しているものなのである。絶望も、罪も、信仰も精神的存在としての人間の個体としての自己を前提としたものである。しかるに、思弁は「神の前のこの個体的な人間」¹⁷⁾を決して思いつかず、個体的な人間を空想的に人類にまで普遍化するに過ぎないのである。「躓き」は思弁や合理主義からキリスト教を防禦するものであるとともに、躓きを越えて信ずる信仰へと導くものでもある。この点で、神を畏れるソクラテスの無知は神と人間との間に明確な「質的差異」を確保するものであり、信仰を思弁から護る無知として、キエルケゴールはソクラテスを高く評価するのである。

第二は、先程の「罪の反対は信仰である」という最もキリスト教的な命題についてである。ソクラテスは「罪は無知である」という。しかし、罪が無知であるとすれば、最早いかなる罪も存在しないことになる。「罪は実に意識には

かならない」¹⁸からである。人間が善を意識的に放棄したり、不正を意識的に為したりすることを、どのように説明すべきであるか。つまり、ソクラテスは罪を規定するまでには至っていないことになる。ソクラテスの罪の規定に欠けているものは、絶望の二つの形態から考えて、「意志と強情である」¹⁹ということになる。ソクラテスの罪の定義の難点は、理解（認識）から行為（実践）への移行に関する弁証法的規定が欠けていたことである。移行に際して、罪は認識にあるのではなくて意志にあることがここに示されなくてはならない。意志は弁証法的なもので、人間の高い性質と低い性質とをともに含んでいるものである。倫理家ソクラテスは、この難点にある程度まで気づいていた、という。純粋な観念性や体系においては、移行は必然的なもので、理解から行為への移行には全く困難は存在しないのである。それ故に「我思う、故に我在り」で、思惟は存在と同一視されるのである。ここでは現実の個体的な人間はならん問題とならないのである。キリスト教では、「汝の信する如く汝になれ」（マタイ八の一三）で、これを肯定文に直すと「汝の信する如くに汝は在る」で、信仰の有無によって現実の個体的な人間の存在が問われているのである。しかし、人間は罪のなかにある故に、「罪の何たるか」を認識し得るのは神の啓示を通してのみである。そこで、「罪とは、人間が正しいことを理解しなかつたということではなくて、それを理解しようとしないうこと、あるいはそれを欲しないことである」²⁰ということになる。キリスト教的に言えば、「罪は認識の内にあるのではなく、意志の内にある」²¹と換言できる。そして、神の啓示が必要とされるところにも、「願きの可能性」があるのである。異教徒や自然人は「罪の何たるか」を知っているつもりであるからである。従って、罪の定義は次のように補足されねばならない。

《罪は、神の啓示によって罪の何たるかが明らかにされた後に、神の前で絶望して自己自身であろうと欲しないこと、あるいは絶望して自己自身であろうと欲することである》²²。

キエルケゴールによれば、「罪は異教においては全然見出されない、それはただユダヤ教とキリスト教においてのみ見出される」²³。それにしても、「大抵の人間の生活は弁証法的に無関心の立場で、善（信仰）からは非常に隔たっており、あまりに無精神的で罪とも呼ばれ得ないほどである、いな、絶望と呼ばれ得ないほどにあまりに無精神的である」²⁴という。

第三は、「罪の積極性」というキリスト教的なものについてである。正統派の教義学は、罪を単に消極的なあるもの、意志薄弱、感性、有限性、無知などと考える罪の定義を汎神論的であるとして拒否してきた、とキエルケゴールはいう。もし罪が消極的なものとして規定されるならば、キリスト教全体が支えを失うであろう、と正統派は見抜いていた、という。このことは、キリスト教全体が信じられるべきもので、概念的に把握されるべきものではないということ、従って信ずるか躓くか（信じようと意志するか否か）に懸かっているということである。実際、罪が概念的に把握し得るものとすれば、罪は一種の消極性となる。キエルケゴールによれば、「罪の積極性を解明できる唯一の側面は、……罪が神の前で起こることである」²⁵。そして、「罪が積極性であるという規定は、別の意味で躓きの可能性、逆説をその内に含んでいる」という。悟性で把握し得ないほどにしつかりと措定される罪が、今や悟性で把握し得ない方法（贖罪）で取り除こうとされるからである。

第四は、啓示の後になっても罪が悔い改められないでいる「罪の継続」についてである。これは、強情を張って罪を悔い改めようとはせず、「罪の一貫性」の内に留まっている、罪そのものの状態のことである。「罪が悔い改めらざにいる各瞬間が新しい罪である。……罪の内に留まっている状態は最悪の罪である。個々の罪は罪の継続ではなくて、罪の継続を示す表現である。……罪の内に留まっている状態は個々の罪よりも悪しき罪である、それは罪そのもので

ある」。²⁷このような状態にあつては罪の度合いは更に深化し、罪の状態の中に留まつてゐるという「意識」をもつて罪の状態の中に留まつてゐるという状態に至るのである。「悪魔的なもの」はその無神的な状態を罪の継続という一貫性によって強化するのである。これは「自己の罪に関して絶望する罪」ともいえるものである。すでに自己の背後の橋は切り落としてしまつたので、最早、善を意志することは不可能である、とそれは意識している。「罪はそれ自体が善からの切断であるが、罪に関する絶望は善からの第二の更に深刻な切断である」。²⁸つまり、「罪」から「罪に関する絶望」にまで至る上昇を、「罪が善との絶交である」とすれば、罪に関する絶望は悔い改めとの絶交である」といえるだろう。この絶望の極みにも悪魔的な自己閉鎖性が見られるのである。また、次に考察される「キリストの前の絶望」(躓き)もまた、「罪の継続」の状態にあるものと解釈できらるであらう。

(C) 最後に、「死に至る病」第二編の後半における「キリストの前の絶望」(躓き)について概観したい。

これは「罪の有しについて絶望する罪」(躓き)のことである。換言すれば、神人キリストによる罪の有しについての躓きのことである。今や自己の尺度はキリストになり、自己意識は最大限に上昇する。絶望は更に深くなる。神は人となることによつて個々の人間に巨大な重さと価値を与えているからである。「キリストの觀念が多ければ多いほど、それだけ自己も多い」。²⁹自己が多ければ多いほど、それだけ罪の度合いも強いのである。この絶望も、絶望の第一形態か第二形態に還元されなければならない。躓いて信する勇氣を失つた弱さの絶望と、躓いて信じようとなしな強い強情の絶望である。

「躓きとは」キリストの前で、絶望して自己自身であらうと欲しないこと、あるいは絶望して自己自身であらうと

欲することである」³¹。

神人キリストの教説は、他のいかなる宗教にも見られない、最もキリスト教的なものである。神人の「絶対的逆説」を前に信じるか躓くかの二つに一つである。躓きはまさに罪の強まったもの、意志の内にあるものである、といえる。しかも、この神人が個々の人間に近づき、罪の宥しを申し出るのである。神と人間との間には深淵ともいえる「質的差異」がある。それが今、神人として僕の姿をとって罪の宥しを申し出るのである、「汝は信するべきである」と。ここに信するか否かの決断が要求される。その意味で、「躓きは、個体的な人間の主体性に関する最高の規定である」といえる。³²

「キリスト教の修練」は躓きについて次のように説明している。「躓きは、神と人間が一体として結合した存在、すなわち神人に対して、本質的に関わるものである」³³。また、「へ信仰」という概念が全くキリスト教独自の規定であるように、信仰と相関関係にあるへ躓きもまた、全くキリスト教独自の規定である。躓きの可能性は分岐点である。……躓きの可能性から道は分かれて、躓きに至るか、そうでなければ信仰に至るのである」³⁴。

尚、「死に至る病」でキリストに対する躓きは、その深まりにに応じて、概略次のように分けられている。

(a) キリストに対する無関心の躓き。

躓きの最低の形態で、キリストに関する全問題を未決定のままに残しておこうとする。キリスト教的な意味で、「汝なすべし」ということを全く忘れ、キリストに対して無関心な態度をとる。またキリストに関する意見を持たず、キリストの神性を否定するのである。

(b) キリストを無視することも信仰することもできない躓き。

蹟きの第二の形態で、否定的で、受動的なものである。キリストを無視することも信仰することもできないで、たえず同じ一点である、逆説を凝視しているもので、人間は、影のような日々を送ることになる。

(c) キリスト教を虚偽として廃棄し、キリストを仮現説的・合理主義的に否定する蹟き（攻撃的）。

この最後の形態は積極的なもので、罪の度合いが極限にまで強められたものである。キリストを悪鬼の所産と考える悪魔的な蹟きで、「聖霊に反する罪」とも呼ばれている。

以上、「死に至る病」における絶望と罪に関する単純な考察を進めてきたが、最後に、キエルケゴールの「罪」理解について、《罪の定義》に基づいて簡潔に整理しておきたいと思う。

《罪とは、神の前に、あるいは神観念を抱きながら、絶望して自己自身であろうと欲しないこと、あるいは絶望して自己自身であろうと欲することである》。

キエルケゴールの「罪」理解は、この《罪の定義》に要約されていると思われる。すなわち、「罪の定義によれば、罪を構成しているものは、神の観念によつて無限にその度合いが強められた自己であり、従つてまた行為としての罪についての最大限の意識である」。ここには、罪が罪であるための三つの重要な特徴が見出される。①罪は「神の前に」起こるということ、②罪は具体的な自己において起こるということ、③罪の行為は意識であるということ、である。

①あらゆる罪は「神の前に」起こる。これは、「罪の積極性」についての唯一の表現であり、他のあらゆる汎神論的な罪の定義（意志薄弱、感性、有限性、無知など）をも拒否するものである。この神は、前述のように、警察官の

ような外的、超越的な神ではなくて、内なる「永遠的なもの」の延長線上にある、内的な神、内的な神観念を意味している。「神の前に」とあるという意識、神が内在しているという意識によって、それに対する自己意識は無限に増大する。また、「神の前に」という神観念は、罪を単なる絶望から明確に区別するものである。さらに、神意識は、神と人間との間に「質的差異」を確保し、哲学的に詩的に神と人間とが一に帰せしめられることがないように、信仰を思弁から防禦するのである。

② 罪は具体的な自己に起こる。これは、罪が決して思弁的、概念的に把握されるものではないということである。罪は人類や人間一般に起こるものではないのである。個体としての人間は確かに普遍的抽象的な人間であると同時に、特殊の具体的な個体でもある。この矛盾を孕んだ存在が自己である。個々の人間は、質的飛躍によって人類に参与しているのである。つまり、罪は量的規定ではなく、質的規定なのである。そこで、「時間的なものと永遠的なものとの総合」である人間は、「関係がそれ自身に關係する」ことによって自己なる精神となるのである。思弁は個体的な人間を決して思いつかないのである。

③ 罪の行為は意識である。「意識がもち得る最も具体的な内容は、自己自身に關する、すなわち個体自身に關する意識である。……この具体的な自己意識は、……静観ではない。自己は「実存」生成のなかに巻き込まれているものであり、静観のまとまった対象とはなり得ないものである。……このような自己意識は行為である」³⁶。それ故に、「関係がそれ自身に關係する」自己は、実存生成における意識的、意志的な主体的關係行為なのである。しかも自己は他者(神)によって措定され派生させられた、自己關係と他者關係という二重の關係をもつ存在である。しかも他者(神)はこの自己なる關係を、いわば彼の手から解放するのである、という。「いわば」という言葉には深い意味が

隠されている)。ここに自己には自由と責任が生じるのである。つまり自己は、自己の意識的、意志的な関係行為(実存生成の課題)を、自己の自由と責任のもとに遂行するのである。その場合、自由は善でも悪でも選択できるという恣意的自由を意味するのではなく、自由は責任に縛られた自由でなければならぬ。それは他者(神)によって根源的に正しく措定された総合を、信仰という自由なる意志と決断で、自己の責任において受け取り直すことに外ならない。

他方、聖書は神への不従順、つまり神の意志を己の意志としないことを罪と規定している。罪の行為は意識であり、具体的には意志と強情なのである。それ故に、意識は決定的なものである。絶望も罪も信仰も、すべて意識において生起する。意識の「態度」(在り方)によって、絶望と罪の形態にも強弱の変化が起こる。なかでも、意識的に罪が悔い改められずにいる「罪の継続」(罪の一貫性)の状態は、透明な意識をもった「悪魔的なもの」(罪そのもの)の表象であつて、従つて自己なる精神の死を意味している、といえる。

以上の考察から、キエルケゴールの「罪」理解を一言で要約すれば、「神の前の関係破綻」ということになるだろうか。「神の前に」現存する単独者の自己意識が決定的なものである。その意識の「態度」(在り方)によって、自己関係と他者(神)関係に不均衡と振れが生じ、罪が生じるのである。最初、(罪は(神観念によって)質的に強化された絶望である)といわれたが、結局、ここでも同じことがいわれるのである。

そこで絶対的に何らの絶望も存在しない信仰の定義は次のようになる。

「自己はそれ自身に関係することにおいて、そしてそれ自身であろうと欲することにおいて、自己はそれ自身を描定した力のなかに透明にみずからを基礎づける」。

註

註の文献略号は左記の通り。

SV Søren Kierkegaard: Samlede Værker, Bind I-20, Udgivet af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange. Gyldendanske Boghandel, Nordisk Forlag, Kjøbenhavn.

GW Søren Kierkegaard Gesamelte Werke in GTTB Siebenstern, Herausgegeben von Emanuel Hirsch und Hayo Gerdets, Gütersloher Verlagshaus, Gerd Mohr.

尚、日本語訳は左記のものを参照。適宜、引用をせて戴いた。

『死に至る病』（斉藤信治訳、岩波文庫、一九八六）

『不安の概念』（斉藤信治訳、岩波文庫、一九八五）

『キリスト教の修煉』（杉山好訳、キルケゴール著作集第一七

巻、白水社、一九七九）

(1) SV, Bind 15, S.73, GW, 24/25. Abt. S.8.

(2) Vgl. SV, Bind 6, S.170ff, GW, 11/12. Abt. S.82ff.

『不安の概念』では、人間は精神によって担われる「心と肉体との総合」（高次的には「精神と心・肉体」との総合）と呼ばれ、『死に至る病』では人間は「時間的なものと永遠的なものとの総合」と称される。この高低二重の総合の形式は『不安の概念』と『死に至る病』の内容（不安と絶望）に対応したもので、不安は「心と肉体」という心

キェルケゴールの「罪」理解（山本）

理的規定のもとにあり、絶望は「時間的なものと永遠的なもの」という精神的規定のもとにあることの表現である。

「精神と心・肉体」との総合は、「精神」が「永遠的なもの」「心・肉体」が「時間的なもの」と言い直されて、「時間的なものと永遠的なものとの総合」とも呼ばれる。この「精神と心・肉体」との総合「つまり「時間的なものと永遠的なものとの総合」が果たされるのは、「瞬間」における人間の意識的、主体的な総合の關係行為によるのである。換言すれば、「瞬間」における人間の意志と決断によって遂行される、可能性から現実性への実存生成の「歴史的」運動によるのである。「瞬間」とはもともと永遠の

アトムなのであり、「永遠（的なもの）」は絶えず「時間（的なもの）」に浸透しているのである。（拙論『キェルケゴールの「自己の定義」について』（京大『基督教学研究』第九号参照）

(3) SV, Bind 15, S.73, GW, 24/25. Abt. S.9.

(4) SV, Bind 15, S.75, GW, 24/25. Abt. S.11.

(5) (2) 参照。

(6) SV, Bind 15, S.87, GW, 24/25. Abt. S.25.

(7) SV, Bind 15, S.98, GW, 24/25. Abt. S.39.

(8) Ibid.

(9) SV, Bind 15, S.73, GW, 24/25. Abt. S.73.

(10) SV, Bind 15, S.127, GW, 24/25. Abt. S.74.

『不安の概念』によれば、「悪魔的なもの」は心身面から精神面に至る広範囲に現れる現象で、本質は不自由性と閉鎖性である。突発的なもの、無内容なもの、退屈なもの、でもある。悪魔、悪魔的な人間、悪魔的なもの、などと使われる。「悪魔的なもの」は無神的な自己閉鎖の状態である。状態は一種の可能性であるため、そこから個々の罪が出現し得るのである。

- (11) SV, Bind 15, S.131, GW, 24/25. Abl. S.75.
 (12) Ibid.
 (13) SV, Bind 15, S.134, GW, 24/25. Abl. S.79.
 (14) Ibid.
 (15) Ibid.
 (16) SV, Bind 15, S.131f., GW, 24/25. Abl. S.75f.
 (17) SV, Bind 15, S.136, GW, 24/25. Abl. S.82.
 他の箇所「罪の範疇は個体性¹の範疇である」とあるのも、同様の意味である。思弁は、個体的な人間を考えることができないと同様に、個体的な罪人²を考えることができないのである。(SV, Bind 15, S.168, GW, 24/25. Abl. S.120.)
- (18) SV, Bind 15, S.142, GW, 24/25. Abl. S.88.
 (19) SV, Bind 15, S.142, GW, 24/25. Abl. S.89.
 (20) SV, Bind 15, S.147, GW, 24/25. Abl. S.94.
 (21) SV, Bind 15, S.148, GW, 24/25. Abl. S.95.

- (22) SV, Bind 15, S.148, GW, 24/25. Abl. S.96.
 (23) SV, Bind 15, S.152, GW, 24/25. Abl. S.101.
 (24) SV, Bind 15, S.153, GW, 24/25. Abl. S.101.
 (25) SV, Bind 15, S.151, GW, 24/25. Abl. S.100.
 (26) Ibid.
 (27) SV, Bind 15, S.156f., GW, 24/25. Abl. S.105ff.
 (28) SV, Bind 15, S.160, GW, 24/25. Abl. S.110.
 (29) Ibid.
 (30) SV, Bind 15, S.164, GW, 24/25. Abl. S.114.
 (31) SV, Bind 15, S.163, GW, 24/25. Abl. S.114.
 (32) SV, Bind 15, S.171, GW, 24/25. Abl. S.124.
 (33) SV, Bind 16, S.85, GW, 26. Abl. S.84.
 (34) Ibid.

聖書は「頭」にいろいろたとえは次のように記している。イェスは「わたしに頭かない者は幸いである」(マタイ一六)という。パウロは「見よ、わたしはシオンに踏きの石、妨げの岩を置く。これに依り頼むものは失望に終わるであろう」(ロー書九の三三／イザヤ二八の一六)と云っている。

- (35) SV, Bind 15, S.151, GW, 24/25. Abl. S.100.
 (36) SV, Bind 6, S.224, GW, 11/12. Abl. S.148f.
 『不安の概念』での不安は心理的、量的規定のもとであり、罪は精神的、質的規定のもとにある。従って不安と罪

の間には越えることのできない深淵がある。不安は罪の心理学的な「近似的極限状態」となり得ても罪とはなり得ないで、そこから罪は、「質的飛躍」によって出現する。つまり、不安の側面から見られる罪は、一つの「出来事」である。この場合、精神的規定のもとにある「質的飛躍」は、心理的規定のもとにある不安がキリスト教と遭遇する象徴である、と考えられる。反面、小論の絶望の側面から見られる罪は、(絶望と罪とが精神的規定のもとにある故に、絶望と罪とは弁証法的な関係を維持しつつ)、神の意志を己の意志とせず、神に対して不柔順な意識的、意志的な行為(逃避、強情、攻撃)を為すことをいうのである。つまり、神に対する意識的な「態度」(在り方)が問題になるのである。「悪魔的なもの」とは、この神に対峙する歪んだ関係(自己関係と他者関係の不均衡)が固定化され、自己閉鎖した状態のことであり、永遠的なもの、つまり精神の死を意味するのである。罪は悪魔の属性そのままに、突発的な飛躍として、また自己閉鎖として現象するのである。

(37) SY, Bind 15, S.180, GW, 24/25. Abt. S.134.

「透明に」の意味は、悪魔の精神の透明性と対比されるもので、悪魔とは正反対の質をもった透明性である。先に見たように、宗教的なものを目指す詩人的実存は、その意識において透明化することのできない弁証法的混乱(混濁)をもっているが、これと併せ考えることができる。